

Special Feature

Edition Records



"Edition Records works with artists who share a quality of intent and a vision with a drive and commitment to their art. They are deeply committed to finding their voice that's uniquely theirs, without compromise. They're masters of their instrument, on a lifelong pursuit to create. Our goal is to provide the link and connection between them and you, wherever you are and however you're listening." Dave Stapleton

disk union
DIVE INTO MUSIC.



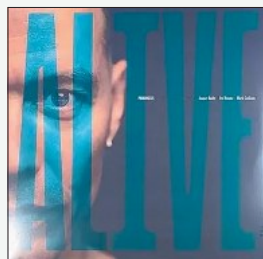
Edition Records

について

Edition Records は 2008 年に設立された UK のインディペンデント・レーベル。当初はピアニストのデイヴ・ステイブルトンが自身や友人の音源をリリースするために設立したものだったが、次第にキース・ティベットのようなベテランから、マーク・ロックハート、アイヴォ・ニームなど、本国 UK のミュージシャンを紹介するローカル・レーベルとなっていく。2014 年ごろからはフィンランドのトランペッター Verner Phojola、ノルウェーのチューバ奏者 Daniel Herskedal、デンマークのジャズバンド Girls In Airports などと契約し、それまでも繋がりがあった北欧のアーティストの紹介にも力を入れ始める。そして 2019 年、当時 ECM 所属で、新作のリリース先を探していたクリス・ポッターと契約し、アルバム『Circuits』をリリース。これを皮切りにアメリカでも評判が広がり、ニーボディ（ベン・ウェンデル）、パッド・プラス、カート・エリング、リオネル・ルエケ、デイヴ・ホランド、グレッチェン・パーラト、マーク・ジュリアナ、ネイト・スミス、マーキス・ヒル、ギラッド・ヘクセルマ

ン、ダニー・マッキヤスリン、ジョン・パティトゥッチ、そして挟間美帆と、現行の US ジャズ・シーンのトップ・プレイヤーが続々と移籍。瞬く間に現代ジャズを牽引するレーベルとして現代屈指の存在感を示すようになった。グラミー賞には毎年のようにノミネート作を送り出し、本国でも Dinosaur と Fergus McCreadie をマーキュリー・プライズにノミネートさせている。若手、新人の発掘にも前向きで、配信メインでハイブリッドな若手アーティストの作品を紹介するレーベル "E2 Music" を設立。また一見ジャズ作品とは思わせない、グラフィカルでスタイリッシュなアルバム・アートワークも、他のジャズ・レーベルとは一線を画する特徴だ。2026 年の後半も、ニルス・ベッター・モルヴェル、リチャード・スベイヴン、グレッチェン・パーラトの新作をアナウンスしている。その勢いと存在感は今や現代ジャズを聴く上で無視することが出来ない…どころか、老舗ブルーノートや ECM と並び、今もっとも注目すべきジャズ・レーベルのひとつである。

(逆瀬川)



format : 2LP
number : EDNLP1185LTD
original release : 2010

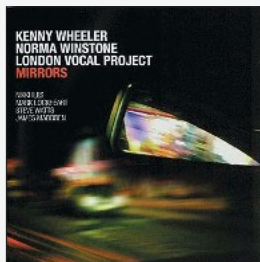


Phronesis

Alive (LP Reissue)

フロネシスは Edition にとって特別なグループだ。よって今回の特集では絶対に筆頭で取り上げたいと考えていた。UK 新進気鋭のピアノトリオとしてデビューし、オリジナル・メンバーのアイヴォ・ニーム (p)、ヤスパー・ホイビー (b) に、当時アヴィシャイ・コーエンの若くてヤバイドラマーとして耳目を攫っていたマーク・ジュリアナを迎え、Edition から 2010 年にリリースされた名盤が『Alive』である。2000 年代はピアノトリオの大ブームで、UK であれば Basho Records の趣味の良い新譜を手に入れたジャズ・ファンの顔は実に輝いていたし、店としてそのブームをおおいに煽った自覚もある。対して Edition は当初から些か異なる気配があった。同時期出てきた Whirlwind もそう、何かしらジャズ・シーンを揺るがしてやろうという気概に満ちていて、個人的には取付き難さすら感じたものだ。そこに満を持して登場したのが『Alive』。これにはシャッポを脱いだ。エスビヨルン・スヴェンソンを喪ったジャズ界を絶望から救ったように感じた。ピアノトリオはまだ刺激的だぞ！ 2022 年に至ってもヴァイナルで再発されることが特別の証。

(羽根)



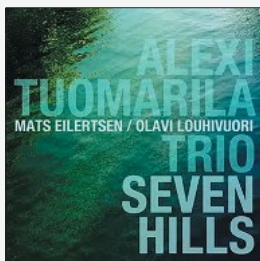
format : CD
number : EDN1038
original release : 2013



Kenny Wheeler, Norma Winstone & London Vocal Project *Mirrors*

傘寿を過ぎたケニー・ホイラーは長年温めていた声楽作品の素晴らしい演奏を聴き、レコーディングを思い立った。年来の友人であるビート・チャーチルの率いる合唱グループ「ロンドン・ヴォーカル・プロジェクト」がそれを演奏したのは2011年のこと。しかしこの野心的な作品をリリースしてくれるレーベルはあるだろうか？そこで手を挙げたのが、新進気鋭の Edition Records だった。「デイヴ・ステイブルトンはこの企画に並々ならぬ情熱を注いでくれた」とチャーチルは語る。そうして生まれたこの『Mirrors』は、ジャズ・コンボを伴奏に合唱と独唱が繊細に絡み合う、現代的な声楽アンサンブル作品である。独唱は盟友ノーマ・ウィンストン。緻密なスコアには作曲家ケニーの手腕が遺憾なく発揮されており、合唱団は透明な響きで W.B. イェイツやルイス・キャロルの詩文を歌う。『Windmill Tilter』(1969) 以来の透きとおった軽やかなサウンドの、ひとつの完成形だろう。生前のケニーは新曲をチャーチルへ送り続けていたが、それらは今年『Vital Spark』として日の目を見た。リリースはもちろん Edition から。

(東館)



format : CD
number : EDN1041
original release : 2013



Alexi Tuomarila Trio *Seven Hills*

本作は、アレクシ・トゥマリラ (p) の「高度な対位法」や「緻密な変拍子」といったロジカルなブラッド・メルドー直系の超絶的なアプローチの構築美の端々に覗く、北欧ジャズ特有の「教会音楽のような冷徹で厳かな和音の陰影」、e.s.t. を思わせる「ポストロックの・ミニマルな熱量」、それに対峙するマッツ・アイレットセン (b) とオラヴィ・ロウヒヴオリ (ds) の色彩的な残響による空間構成という北欧最高峰の美意識を持つリズム隊とともに、瞑想的な静けさから内熱的なダイナミズムまでを描き出し、深いエモーションと、新世代のスマートな創造性を共鳴させた傑作に仕上がっている。アンドレ・フェルナンデス (g) の参加曲でのコンテンポラリーな響きは、アレクシやロブ・ロフト (g)、キット・ダウンズ (p) といった、名門「ECM」とも深く関わる才能を積極的にフックアップし、ECM 的クワイエット・ストームな透明感を活かした静寂の美学を受け継ぎつつ、現代的なビート感覚や、風通しの良いオープンな音響設計で、新たなジャズのカラーを提案する「Edition Records」レーベルのアイデンティティを象徴していると言っていいだろう。

(四浦)



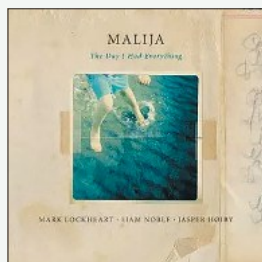
format : CD
number : EDN1048
original release : 2014



Slowly Rolling Camera *Slowly Rolling Camera*

ゆっくり回るカメラというユニット名から映像的な印象を受けるが、ちょっと待てよ？ゆっくり回して撮影したフィルムを現像して映写機にかけると、連想するようなスローモーションではなく逆に早回しの映像になるが... 言葉の雰囲気だよ、フニイキ、細けえな！と海の彼方から声無き気配が伝わってくる。1曲目は'90年代にレコードの早回しで誕生したドラムベースの人力生演奏版のような趣き。あれ？さっきのツッコミはあながち的外れでもなかったかな？21世紀初頭にインターネットを介してデスクトップモニターからベッドルームに溢れ出したエレクトロニカの潮がゆっくりと引いていった後、前世紀に放置されたトリップホップの残骸を楽器の達者なジャズ奏者が再構築してみた。そんな感じのサウンドである。ストリングスを配したスビリチュアルで空間的な音設計は4ヒーローを、曇り空に覆われた埠頭のような逃げ場のない低彩度の音風景はマッシュ・アタックを彷彿とさせる。アコースティックなコンテンポラリーアート志向の作品を発表してきたデイヴ・ステイブルトンがバンドメンバーやゲストと共にクラブミュージックにアプローチしたおそらく最初の作品。

(赤尾)



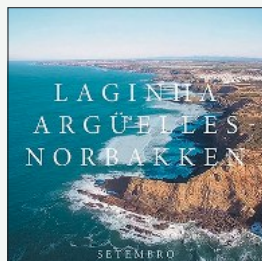
format : CD
number : EDN1064
original release : 2015



Malija *The Day I Had Everything*

1960年代の初頭、ポール・ブレイとスティヴ・スワロウを擁した時期のジミー・ジュフリー・トリオは、当時にして真に独自の音楽表現を実現した孤高のトリオでありました。ドラムスを廃した室内楽的編成と硬派なインプロヴィゼーションが特徴的で、明確にフォロワーと呼べる存在も見当たりません。そんなジュフリー・トリオの遺伝子を受け継ぐようなグループがこのMalija。フリージャズ的なアプローチは控えめではありますが、ドラムレスの編成だけでなく、透き通るような空気感や絶妙に聴き手ををはぐらかすようなアプローチにも共通点が見出せるように思われます。Phronesisのベースistとしても知られるJasper Hoibyをはじめ、かねてよりEditionレーベルを通じてお互いの音楽性を認め合ってきた3者による自由闊達な表現力が見事に昇華されています。こういう抑制された作品こそ、スピーカーの大きな音で楽しめることをおすすめいたします。

(吉良)



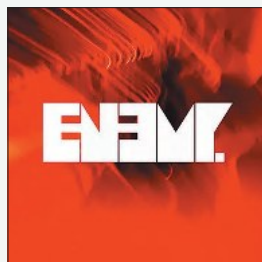
format : CD
number : EDN1099
original release : 2017



Mário Laginha, Julian Argüelles *Setembro*

ポルトガルのピアニスト、マリオ・ラジーニャ、イギリス出身のサクソ奏者ジュリアン・アルゲイエス、ノルウェーのパーカッションist、ヘルゲ・ノールバックケンという変則トリオによる2017年作。聴き始めてすぐにお分かりいただけると思うが、これはラジーニャのメロディラインやリズム、コードワークの美しさを楽しむための作品だ。メロディラインを強調し引き立てるサクソ、時には空間的に、時にはメロディのリズムを補強するように空間を埋めるパーカッション。ピアノとの絶妙なバランスを保ちながら、欧州ジャズと一言では言い切れない無国籍なサウンドが構築されてゆく。ドラムやベースによるグルーブ、トランペットなど別の管楽器を入れてのインタープレイ、あるいはアコーディオンやフルートなどで凝ったアレンジにもできたかもしれない。それらの可能性をすべて切り捨てた先、必要な音のみしか存在しない、引き算による純然たる美がここにある。聴きどころをあえて絞った勝負の作品である。スマホをいじる手を止め、この作品の美しさに飛び込んでいただきたい。

(山田)



format : CD
number : EDN1112
original release : 2018



Enemy *Enemy*

本作はKit Downes、Petter Eldh、James Maddrenらによるピアノトリオで、Downesのメロディ、トリオの縦横無尽なリズムがスリリングな快作。1曲目をまず聴いてほしい。メロディー以降のセンスも感じさせながら、ハイハットがコンマ単位で遅れたり、ブレイクを挟んだり、美麗さと緊張感漂わせる演奏がかっこいい。例えばクリス・デイヴ、ネイト・スミスが参加している作品のリスナーにもこれはアタリアルバムだろう。2010年代以降、ジャズ・プレーヤーがプログラミングされたフレーズを生演奏に翻案していくような側面があったが、ENEMYは「フレーズをカットアップしたらタイミングがずれちゃった」ようなことをそのまま生演奏している点にその特異さがある。ECMからリリースされたKit Downes名義の『Vermillion』、本作をさらに押し進めたWe Jazzからの『The Betrayal』も必聴である。

(荒川)



format : CD
number : EDN1118X
original release : 2018

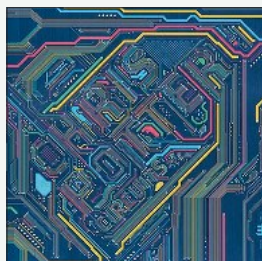


Phronesis

We Are All

アルバム・アートワークは Edition を語る上で欠かせない要素のひとつ。当初はデイヴ・ステイブルトンが自ら撮影した写真を使用していたが、設立 10 周年を迎えた 2018 年からデザイナーの Oli Bentley が参画、以降アートワークを手がけるようになる。文字情報を極力廃したグラフィカルなアートワークは、一見するとジャズのアルバムとは思えないほどスタイリッシュ。ジャケット右下にさりげなくロゴを配しているのも洋服のタグみたいでオシャレ。既存のジャズ・レーベルの感覚からはなかなか出てこないセンスだ。本作は 2010 年から Edition に所属、ヨーロッパで高く評価され日本でも人気を博した、Ivo Neame (p)、Jasper Høiby (b)、Anton Eger (ds) のトリオ "Phronesis" による 2018 年作。Oli Bentley と彼のデザイン事務所 Split が手がけた最初期のアートワークのひとつである。今の Edition があるのはデザインあってこそ、ということ。

(逆瀬川)



format : CD
number : EDN1123
original release : 2019

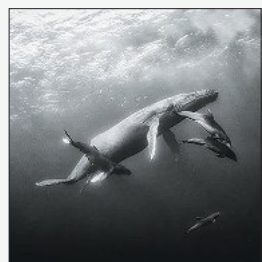


Chris Potter

Circuits

Edition Records が現代ジャズ・シーン有数のレーベルとなったきっかけに、2019 年のクリス・ポッターとの契約がある。当時のクリス・ポッターは ECM 所属。新作の方向性が ECM 向きでないことをマネージャー経由で知ったデイヴ・ステイブルトンが声をかけ、契約が実現した、とのことらしい。その第一弾が、ドラムにエリック・ハーランド、キーボードにジェイムズ・フランシーズを迎えたエレクトリック・プロジェクト。2018 年にブルーノートからリーダー・デビューしたばかりの新鋭ジェイムズ・フランシーズをサウンドの要として起用しているのが大きな注目点だろう。ベースレスの "アンダーグラウンド" に対し、こちらはフランシーズがシンセベースも演奏（数曲でベーシストも参加）、サウンドのエレクトリック度は格段に上がった。2021 年には同じバンドで続編『Sunrise Reprise』もリリースしている。Edition にはこの契約を皮切りに、US の有力ミュージシャンがこぞって移籍してくることになる。レーベルの飛躍のきっかけとなった重要作としても、気鋭の若手との刺激的なコラボレーションとしても必聴の一枚だ。

(逆瀬川)



format : CD
number : EDN1133
original release : 2019

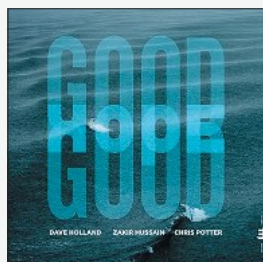


Kevin Hays and Lionel Loueke

Hope

ピアノ + ギターによるデュオフォーマットの嚆矢でありながら、いまだ最高峰として聳え立つ名盤『Undercurrent』。様々なアーティストが思い思いのアプローチでこの編成に挑み、多くの名作が産み落とされましたが、その頂にもっとも接近することに成功した傑作がこの『Hope』です（あくまで個人の感想です）。かつて仏 Newvelle Records から LP のみでリリースされたアルバムに 3 曲を追加しリマスターされ Edition から CD で再リリースされたもの。一糸乱れぬリズム感覚と緊密なインタープレイ。随所で聴かれるヴォイスも音楽表現の重要なエレメントとして機能させ、各々のバックグラウンドを無理なく融合。自然体の瑞々しい感性で綴られる全 11 曲。アンサンブルの最小単位であるデュオ編成でありながら、広大な大地を想起させるスケールの大きさ、二人のイマジネーション豊かなソロなど、繰り返し鑑賞することに深みを増す圧巻の内容です。優しくあたたかな眼差しに心を洗われるタイトル曲は、何度聴いても涙腺が緩みます。

(吉良)



format : CD
number : EDN1136
original release : 2019

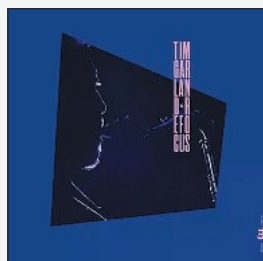


Dave Holland, Zakir Hussain and Chris Potter

Good Hope

デイヴ・ホランド (b)、ザキール・フセイン (tabla)、クリス・ポッター (sax)、の奇跡のコラボレーション、『Crosscurrents Trio』の2019年録音作品。残念ながら、ザキール・フセインが2024年に亡くなった為、このトリオでの録音は、これが最初で最後となります。言うまでもなく、それぞれが超トップクラスの楽器のマイスターであるので、どうしても期待するのは超絶的なテクニックの応酬に行きがちですが、この作品の聴きどころは、表面的なテクニックではなく、完璧なリズムとビートだと思います。どんなフレーズでもブレないサックス、細かいビートを刻みながらもグルーヴ感が豊かなタブラ、そしてそれに全く動じることなくガッチリと合わせるベース。特にベースとタブラが、シンクロを乗り越してまるで1つの楽器のように聴こえます。それらを全く力むことなく、リラックスして演奏するところは、素晴らしくため息が出るばかりです。あ、もちろん目にもとまらぬ超絶テクニックも随所に聴けます。

(川村)



format : CD
number : EDN1159
original release : 2020



Tim Garland

Refocus

スタン・ゲッツの作品群の中でも『Focus』(邦題:『焦点』)は、時期的にも編成的にも変わった作品だ。ストリングスに加えて、リズム・セクションにはスティヴ・キューンとロイ・ヘインズが加わっている。そんなマニアックなアルバムのトリビュート作というのが本作品『Refocus』だが、意外にも一曲目以外は全曲オリジナル。『Focus』の世界観を自分なりに解釈し、現代的に推し進める。マニアックな題材を進化させるという、初っ端から聴く人を選びそうなチャレンジ精神に満ち満ちた作品になっている。一般的に、いわゆる「ウィズ・ストリングス」作品は全体的に甘口でイージー・リスニングに寄った作品も多いが、この作品はそうはいかない。ゲッツのトーンにも似た、なめらかさと殺気が共存するようなティム・ガーランドのテナー、甘美なストリングスが混ざり合う一方、リズムが際立ったソリッドな展開があったり、そもそもテナーの覇気も凄まじい。甘いだけ、ハードなだけでは終わらない。映画音楽のようにどんどんと進んでいき、インタープレイもスリリングに展開する。「ウィズ・ストリングス・ジャズ」の新たな景色を見せてくれる作品だ。

(山田)



format : CD
number : EDN1161
original release : 2020

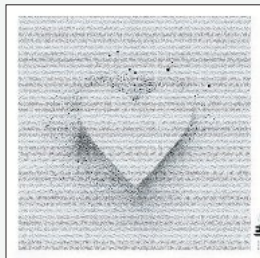


Lionel Loueke

HH

「幸運の女神には前髪しかない」なんて言いますが、ベナン共和国出身のギタリスト、リオネル・ルエケはまさに幸運の女神の前髪を掴んだ人。1年かけて貯めた50ドルで初めてのギターを買い、弦が切れれば自転車のブレーキケーブルで代用する。自身が「貧しい知識人一家」と語る環境で育ちながらも友人が持ち帰ったジョージ・ベンソンのレコードとの出会いをきっかけにジャズの道を切り開いていきました。さらにパークリー音楽大学への留学、そしてセロニアス・モンク・ジャズ・インスティテュートでハービー・ハンコックと出会ったことで、その才能は世界へと羽ばたきます。本作は2020年発表のハービー・ハンコック・トリビュート作品。スキャットを交えた7弦ギター1本で名曲群を大胆に再構築しています。おなじみのメロディから自由奔放なアドリブへ発展していく演奏は圧巻の一言。彼ならではの生命力あふれる表現に思わず引き込まれてしまう一枚です。

(中村)



format : CD
number : EDN1162
original release : 2020



Ben Wendel *High Heart*

クリス・ボッターのEdition移籍後、早いタイミングでそれに続いたのがベン・ウェンデルだった。2019年にエレクトリック・バンドのニーボディでアルバムを出した後、2020年にリリースしたのがこのリーダー作である。ファンの注目を集めたのはやはりジェラルド・クレイトンとシャイ・マエストロのツインキーボードを擁する編成だろう。かたやピアノ、かたやローズ、と役割を分けているが、現代トップのピアニスト2名を同時に使うという贅沢さといったら。そして何よりサプライズだったのはマイケル・メイヨの起用である。この頃既にいくつかの作品に参加してはいたが、シーンで頭角を表し始めたのはこの作品あたりからだ。新進気鋭のヴォーカリストがこのバンドで歌うのはスキャットのみ。滑らかなハイトーン・ヴォイスを楽器のごとく自由自在に操り、ベン、ジェラルド、シャイらと渡り合う。特に複雑でテクニカルなメロディーの「Burning Bright」でのスリングなユニゾンとソロ回しは、アルバム2曲目とはいえ本作のハイライトのひとつである。欲を言えばこのバンドでのライブが見たかった…。

(逆瀬川)



format : CD
number : EDN1166
original release : 2021



Snowpoet *Wait For Me*

2016年にジャズFM・ヴォーカリスト・オブ・ザ・イヤーを受賞したアイルランドのヴォーカリストのローレン・キンセラと、マルチンストゥルメンタリスト / プロデューサーのクリス・ハイソンによるソングライティング・デュオ。彼らを中心としたロンドンを拠点に活動するグループ、スノーポエットの2021年作。まず耳を奪われるのは、ローレンのヴォーカル。ベッカ・スティーヴンスのようなアンニュイな歌い回しと滑らかさ、別次元を思わせる神秘性はビョークを彷彿とさせつつ、歌の輪郭にあるのは凛とした上品さで、どこか親しみも感じられる。そんな類まれなヴォーカリストをフロントに、サウンドデザインも冴えわたるのがこのバンドの魅力。UKジャズにエレクトロニック、クラシックが響きあう、オルタナティブでポップかつ革新的な音作り。ドラムやサクソをはじめてするアコースティックな音色に重なるシンセやビート、ストリングス、コーラスワークによって立ち上がる、キレのある立体感ほくせになる心地よさ。散りばめられる遊び心の詰まったアイデア、ポエトリーリーディングも印象的。日本ではまだあまり知られていない、歌もの随一の出会いだった。

(松本)



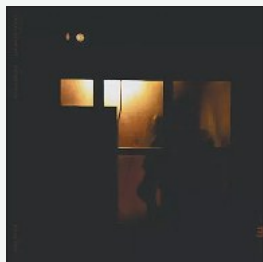
format : CD
number : EDN1167
original release : 2021



Eyolf Dale *Being*

ここには、純粋に「美しいもの」を「一緒に」追求める3人のミュージシャンの「初期衝動」が刻まれている。現代の詩的ピアノ・トリオの誕生である。テクニクの応酬や知的な変拍子を競う同時代のトレンドとは一線を画し、本作でエイヨルフ・ダーレ (p) が徹底したのは「圧倒的なリリカルさ」の追求だった。「トリオ・ミュージック」という内省的テーマを反映したサウンドは、後年の統作群の緻密な構築美と比較しても、際立って純度の高い哀愁とロマンティズムを放っている。この叙情性を支えるのが、パール・ザムッシ (b) の力強いアコースティックな音色による深く俊敏で変幻自在な即興性を伴った包容力と、アウドゥン・クレイヴ (ds) の先鋭的なフュージョン〜エレクトロ感覚をアコースティックなジャズという伝統的枠組みへと見事に落とし込んだ、ポリリズムと残響を緻密にコントロールした「アンビエントな陰影」を醸し出すドラミングであった。メカニカルな推進力に走らず、メロディを最大限美しく響かせる空間設計。この静密なリズムと極限まで磨かれた旋律の融合、そして何が起るかわからない即興の余白にこそ、このトリオの最も美しい瞬間が息づいている。

(四浦)



format : CD
number : EDN1169
original release : 2021



Sachal Vasandani, Romain Collin *Midnight Shelter*

2020年のパンデミック。人々が身を守るために家に籠ったロックダウンの日々。今や懐かしさすらある響きだが、あれほど世界中のあらゆる人々が孤立し、孤独と向き合う必要に迫られたことがあっただろうか。シカゴ出身のヴォーカリスト サシャル・ヴァサンダーニと、フランス出身のピアニスト ロマン・コランによるこのアルバムが生まれたのは、まだ人々が不安と孤独を抱えていた2021年。ヴァサンダーニのあたたかい低音の歌声と、中〜低音域に徹したコランのピアノ、深い情感を湛えた二人の共演が生み出した傑作である。当時、先行きの見えない日々、真夜中のメランコリックな気分に取り添い、人々の不安な心を解きほぐしてくれたことだろう。世間がパンデミック前とほとんど変わらない日常を取り戻した今も、孤独を愛し、真夜中に思いを巡らせる人々の隣に、いつもこのアルバムはある。ひとりであること、孤独であることを肯定するように、聴く者を夜半に優しく包み込む。まさに「真夜中の避難所」のように。

(逆瀬川)



format : CD
number : EDN1184
original release : 2021



Nate Smith *Kinfolk 2: See the Birds*

現代最高のドラマー、当代一のグルーヴ・マスター、ネイト・スミスのリーダーバンド "Nate Smith Kinfolk" による2作目は Edition からのリリース。変拍子の「Square Wheels」や、リヴィング・カラーのヴァーノン・リードがゲスト参加したハードな「Rambo: The Vigilante」など、リズムで遊ぶような楽曲とプレイがエキサイティング。新鋭ジョエル・ロスやマイケル・メイヨを迎えたコンテンポラリーなジャズ・トラック、ミント・コンディションのストークリーと絡むビューティフルなストリングス、アラバマ・シェイクスのブリタニー・ハワードのゴスペル・バラードがハートをあたためる。そのゲスト人脈の幅広さはネイトの仕事遍歴のあらわれであり、彼が様々な場所で信頼を得てきた証だ。豪華な面々との素晴らしいコラボレーションを実現する巧みな楽曲、アレンジ、プロダクションも当然ネイトの手腕。その上で、バックで歌いまくるドラムが最高に楽しくカッコいい。

(逆瀬川)



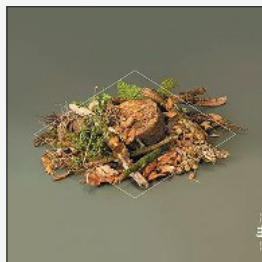
format : LP
number : EDNLP1170
original release : 2021



Gretchen Parlato *Flor*

Editionに移籍して放った8年振りの新作は、まさにグレッチェンのターニング・ポイントとなるアルバムでした。スペイン語・ポルトガル語で「花」と冠せられ、ブラジル音楽のエッセンスを取り入れた本作には、子育てを経た彼女の変化が作品に投影されています。世界の美しさとその儚さを分かち合う秀作で、人生の傍らにずっと寄り添ってくれる1枚となってくれるでしょう。アートワークの美しさとその音楽性からレコードで聴くのがぴったりだと思っていて、CD派の私もこれはレコードで持ってます。ご友人を招いた際やカフェでもぜひ流してみてください。「素敵な音楽…誰ですか?」「グレッチェン・パラトって今のアメリカのジャズ・ヴォーカリストで、ドラマの『大豆田とわこ』の挿入歌を歌ってたのも彼女なんですよ」と話が拡がっているのが目に浮かぶよう。グレッチェンの素晴らしさをジャズに留めておくなんてもったいない! お薦めはM3,7です。

(久保田)



format : CD
number : EDN1197
original release : 2022



Fergus McCreadie

Forest Floor

設立初期の Edition Records は、デヴィ・ステイブルトン自身の作品や、本国 UK のアーティストの作品をリリースするローカル・レーベルの色が強かった。北欧、そして US のアーティストと関係を結んだ現在でも、UK のアーティストをサポートする姿勢は変わっていない。むしろレーベルとしての規模が大きくなったからこそ、彼らをさらに広いリスナーに届けることが出来ていると言えるだろう。1997 年生まれ、スコットランド出身のピアニスト Fergus McCreadie は 2018 年に自主制作盤でデビュー。2021 年から Edition と契約し、スコットランド音楽の要素を取り入れたコンテンポラリーなピアノトリオ作品をこれまで 4 作リリースしている。本作は Edition での 2 作目で、2017 年の Dinosaur に続き、UK の音楽賞、マーキュリー・プライズにノミネートされた。今や Edition の看板アーティストのひとりと言っても過言ではないだろう。Edition は US ジャズ・シーンでも屈指の存在感を示しながら、本国でも気鋭の若手を紹介し高い評価を得ているのである。

(逆瀬川)



format : CD
number : EDN1201
original release : 2022



Gilad Hekselman

Far Star

ネガティブな社会情勢や制約下で、逆に芸術の花が咲いた例は枚挙に遑がないが、本作もその好例である。パンデミック下での宅録、共演者不在の状況でのオーバーダブなど、制約だらけで生み出された本作には、驚くほど多様な音色、アイデアが詰め込まれており、ジャズ・ギターの現在地を俯瞰するには最適な傑作であると同時に、ストリーミング普及とヴァイナルの復活という荒波の中で、リスナーに挑戦的な音楽を届ける手段を様々な模索、開拓してきた如何にも Edition らしい力作と言える。実は個人的に本作の真価に刮目したのは、リリースからしばらく経てのことである。2022 年録音、2024 年にフィジカルがリリース（ヴァイナル・オンリー！）の『Life, At The Village Vanguard』というお洒落なタイトルのライブ盤がとにかくもう最高にノリノリで、本作のタイトル曲である“Far Star”でラリー・グレナディアの唄まくるソロに悶絶していると、そもそもこれ曲が良いんじゃない？カートっぽさもあるし、などと気軽に Edition 盤を聴き返して驚愕。ヘクセルマンの才気煥発なオリジナル曲が出るわ出るわ、という次第。

(羽根)



format : 2LP
number : EDN2LP1190
original release : 2022



Marquis Hill

New Gospel Revisited

ウォルター・スミス 3 世 (ts)、ハリシュ・ラガヴァン (b)、ケンドリック・スコット (ds)、当時の新世代筆頭ジョエル・ロス (vib)、ジェイムズ・フランシーズ (p) ら US 最高峰ミュージシャンが参加！現代ジャズ・トランペッター、マーキス・ヒルがファーストアルバム『New Gospel』(2011 年) を新たな解釈で再演した、地元シカゴでのライブ録音盤。近年の R&B/ ヒップホップを取り込んだアプローチや、『Rituals + Routines』(Edition RECORDS 2023 年) のようなハイブリッドな要素は抑えられ、本作ではアコースティックサウンド主体の硬派なコンテンポラリージャズを披露。緊迫感漂うなかアドリブを繋ぐ「Law & Order」、ソウルフルでキャッチーな「The Thump」、各メンバーのソロから始まるライブならではの演出など、US トッププレイヤーが放つ熱量をリアルに体感できる一枚。

(中島)



format : LP
number : EDNLP1199
original release : 2022



Sachal Vasandani, Romain Collin

Still Life

コロナ禍の最中、暗闇の中にふと灯った光のように我々を癒した名作『Midnight Shelter』から2年。コロナ禍が去ってなお様々なことが起こり、社会もじわじわと、あるいは部分的には目まぐるしく変わっていく。それでも我々の生活は続いていく。ビリー・アイリッシュやピーター・ガブリエルなど、前作同様ジャズにこだわらない選曲。オリジナルやスタンダードも違和感なく混ざり合い、ただそこに「ある」。ターンテーブルに乗せれば、またこの音楽に身をゆだねることができる。『Still Life』とは「動かない命」、すなわち無生物のことを指したり、「静物画」のことを指したりするようだ。この時代において、この作品のような「変わらずにただそこにある音楽」が与える安息は、もはや貴重なものではないだろうか。部屋の隅に飾ってあるアートが、普段は慣れて目に入らなくとも、ふとした瞬間に安心感を与えてくれるように、この作品のことをこれからも時々思い出し、棚からひっぱり出して聴くことになるだろう。大事にしたい一生ものの作品、ぜひレコードでお聴きいただきたい。

(山田)



format : CD
number : EDN1206
original release : 2023



Ben Wendel

All One

ベン・ウェンデルのアルバムはどれも一風変わったものが多い。『High Heart』はツインキーボードにヴォーカルまで入れたバンド、『Seasons』では1月～12月までを1曲ずつ表現、2026年の新作ではワンホーン+4ヴィブラフォンという前代未聞の編成。とはいえベンの場合、「実験的」というよりは、尽きないインスピレーションと積極的なチャレンジのあらわれといった印象がある。その一つの完成形と言えそうなのが本作。テナーサックスのみならず、ソプラノサックス、バスーン（ファゴット）を自ら演奏、多重録音でトラックを構築。木管楽器版ジェイコブ・コリアー、もしくは山下達郎？なんていうトラックに、1曲ごとにゲスト・プレイヤーを迎えた。招聘されたのは上からセシル・マクローリン・サルヴァント、テレンス・ブランチャード、ビル・フリゼール、エレナ・ビンダー・ヒューズ、ホセ・ジェイムズ、ティグラン・ハマシアン、といずれも劣らぬ手練れたち。個人的にはホセのセクシーなヴォーカルが際立つ「Tenderly」が白眉の出来。

(逆瀬川)



format : CD
number : EDN1212
original release : 2023



Eyolf Dale

The Wayfarers

ノルウェーの俊英ピアニスト、エイヨルフ・ダーレの5枚目、トリオ作品。スキルフルなピアノの実力、作編曲家としての能力は折り紙付きで、『Wolf Valley』(2016)によって一躍北欧からヨーロッパのジャズシーンで注目の存在となった。今作は、旅人を意味する『Wayfarers』というタイトルの通り、旅の始まりを感じさせる冒頭から、旅人が立ち止まり、熟考する旅路の過程がテーマだというコンセプトアルなアルバム。オープニングからして、映像がまざまざと浮かんでくる。抽象・映像的なイメージを描きながら、ノルウェーの古典、ジャズ、フォーク、クラシックを融合させたメロディとハーモニーを、緻密な組み立て力とトリオの阿吽の呼吸によって变幻自在に表現する。パップ的な熱も飛び出してくるからすごい。演奏に圧倒されつつ、抒情的な美しさも兼ね備えている。数学的であり、文学的であるともいえる…なんという表現者だろう。それぞれのロマンが溶け合うように煌めきを放つ傑作。

(松本)



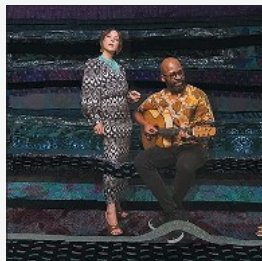
format : CD
number : EDN1220
original release : 2023



Miho Hazama m_unit *Beyond Orbits*

放たれたエネルギーの光塊は流線形の美しい軌跡を描きながら太陽系外へ奔りぬけていく。それは私に、新海誠の映画や川上未映子の小説を思い起こさせる。洗練されたサウンドが繰り広げる緊張と解放のドラマはラージ・アンサンブルがジャズという音楽表現の最前線にいることを確信させる。編曲家・挟間美帆が率いる“m_unit”の特徴は、弦楽器を重要なパートに据えることによる、緻密で落ち着いた室内楽的なテクスチャだろう。m_unit 第5作となる本アルバムでは、さまざまな音色が攪拌され、弦楽とホーン・セクションの境界はぼやけ、絶えず流動する星雲のようなひとつのサウンドを形作る。“軌道系の彼方へ”というタイトルに誇張はない。挟間は『Emanon』で宇宙へ旅立ったウェイン・ショーターをマリア・シュナイダーとともに追いかけているのだろうか。一方で旋律やリフの端々に顔をのぞかせる繊細でノスタルジックな感覚は、坂本龍一、久石譲、菅野よう子、梶浦由記を思い出させる。挟間は日本の記憶を織り込みながら、世界と宇宙に飛び立つ音符を書き続ける。幼少期を過ごした青森で彼女はきっと、冬の天球を埋め尽くす星々のまたたきを見ていた。

(東館)



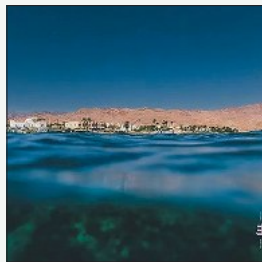
format : LP
number : EDNLP1216
original release : 2023



Gretchen Parlato, Lionel Loueke *Lean In*

爽快さと程よいメロウネスを感じさせるグレッチェン・パーラートのヴォーカルに、リズムミックスかつパーカッシブなリオネル・ルエケのギター・ボーカルのブレいの融合が全編にわたり楽しめるのがこの作品の特長である。冒頭から2人のボーカルのユニゾンが小気味良く躍動する「Akwe」。ルエケのクリック音にも似たボイスパーカッションがスパイスになっており、この作品全体の「グルーヴ観」を提示しているかのようである。ポッサやブラジリアン的要素を感じさせる演奏が楽しめる「Astronauta」も聞き所のひとつ。リラックスして力の抜けたパーラートのヴォーカル、清涼感のあるギターに、時折見せるルエケのバックボーカルのハーモニーが本当に美しい。ボーカル×ギターのユニゾンと、やや高音域のメロディックなギターのオブリガートのフレーズがアクセントになっている「Painful Joy」も聞き応え十分な内容となっている。そして何より、マーク・ジュリアナ(ds, pesc) が7曲で参加していることも、この作品の注目ポイントであろう。結果的にリズムとサウンドに厚みが生まれ、作品全体の印象に安定感とカラフルさを与えている。

(檜山)



format : LP
number : EDNLP1221
original release : 2023



Rob Luft *Dahab Days*

5～6年前、かつて一緒に働いていたK君から、最近イギリスから活きの良いギタリストが出てきたということでおすすめされたのがこのロブ・ラフトでした。その後、エリーナ・ドゥニのECM諸作などで名前を見かけてはいましたが、この2023年のEdition盤で正式にドハマリした次第です。ほのかな中東風エッセンスと、颯爽と駆け抜けるような8ビートが特徴的。ヒップホップ的なビート感覚がポピュラー音楽の中心になって久しいですが、この潔いシンプルなロックフィーリングはなんだか懐かしくも新鮮。例えば古すぎますが、マーク・ジョンソンの[Summer Running]とか、メセニーの「Slip Away」なんかに近い気持ちよさと言いましょうか、すこぶる爽快です。ストリングス・カルテットを迎え丁寧に練られたアレンジ、コンパクトに整理されつつも聴き応えのあるソロなど、プレイヤーのみならずバンドリーダー/アレンジャーとしての一面にも注目してほしい作品です。

(吉良)



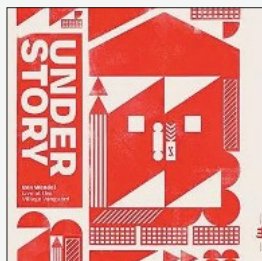
format : CD
number : EDN1250
original release : 2024



Alexi Tuomarila *Departing the Wasteland*

北欧ジャズの大きな転換点としてやはり E.S.T. の存在は外せません。本作もその流れを受け継ぎながらジャズだけでなくロックのダイナミズムも感じさせる内容となっています。まず惹かれたのは『荒野を旅立つ』というタイトルとヴィルヘルム・ハンマースホイの絵画を感じさせる静かなジャケット。音を聴く前から強く印象に残っていました。本作の魅力はアコースティックとエレクトロニック、内省的な感情と普遍的な美しさといった異なる要素を自然に行き来するところ。核となるアレクシ・トゥオマリラならではの叙情的なメロディと北欧らしい透明感のあるサウンドで、長年活動を共にしてきたトリオならではの息の合った演奏が楽曲に説得力を与えています。そこへギターやサックスなどのゲストが加わることで音の奥行きが生まれ作品全体がより豊かで重厚なものになりました。現代の北欧ジャズの魅力が凝縮された一枚としてぜひ味わっていただきたい作品です。

(中村)



format : CD
number : EDN1254
original release : 2024



Ben Wendel *Understory: Live at the Village Vanguard*

現代を代表するテナー・サックス奏者による初のライブ盤、場所はヴィレッジ・ヴァンガードです。ジェラルド・クレイトン、リンダ・メイ・ハン・オー、オベド・カルヴェールという強力メンバーをバックに、オーセンティックな場所にふさわしいワンホーン・カルテットの卓抜な演奏を堪能できます。2020 年の『ハイ・ハート』以降、ベン・ウェンデルは Edition へ移籍し、ヴォーカルを取り入れた現代ジャズらしい作品が続いていました。もっとシンプルな編成で彼のサックスを浴びたいと内心思っていたところに待ってました！とばかりに登場したタイトなライブ盤です。まずは頭から、唯一取り上げられたスタンダードの M3"On The Trail" まで聴いてみてください。現行シーンのトップランナーの吹きっぷりと交錯する強力なバック陣の演奏に唸ること請け合いです。現代ジャズ〜ストリート・アヘッド・ジャズの間を穿つ秀逸なライブ盤をお聴き逃しなく。

(久保田)



format : LP
number : EDNLP1249
original release : 2024



Lionel Loueke, Dave Holland *United*

何と言ってもこの作品の特長は、会話をしているかのような 2 人のインタープレイに尽きる。リオーネル・ルエケの代名詞である、ボイスパーカッションを織り交ぜた西アフリカのポリリズムに由来するリズムミックなプレイはこちらでも健在。そしてそれを完璧に受け止め、一つの音楽に昇華しているデイヴ・ホランドはやはりさすがとしか言いようがない。もちろんホランドはただ受け止めるだけでなく、自身こそメロディックな演奏に終始しているわけだが、それでも音楽的に成立させてしまうのは彼の円熟の成せる技なのかもしれない。丁々発止にお互いのフレーズが絡み合い(ときにぶつかり合い)、躍動的なグルーブを産み出す「Tranxiti」。リラックスした雰囲気なかで、ルエケの肩の力の抜けたボーカルが時折顔を出す「Chantj」。アンティシペーションを効かせた疾走感のあるルエケのギタープレイに抜群のグルーブで応えるホランドを楽しめる、アルバムタイトルにもなっているウェイン・ショーターの「UNITED」などなど、似ているようで何一つとして同じ内容の演奏はない。まさにデュオの良さが存分に詰まった作品となっている。

(檜山)



format : CD
number : EDN1266
original release : 2025



Enemy *Fiend*

現在世界的にその名を広げている Kit Downes が、2009 年当時の新宿ジャズ館をザワつかせたのが「Golden」というトリオ作品。00 年代における Basho Records は欧州域の質の高いアーティストを紹介していたため、無視ができないハブになっていました。このトリオのドラマー James Maddren に加えて、現世代で高い求心力を誇るスウェーデン人プロデューサー / ベーシストの Petter Eldh を加えての即興ピアノトリオ ENEMY が発足したのが 2018 年。正直なところ、この頃は Petter Eldh の重要性を認識していませんでした。端的に言うと、Kit Downes を含む 00 年代に数多く生まれた Brad Mehldau フォロワーと E.S.T. の流れからなる欧州目線を土台に、Petter Eldh がビートを主導しつつ全体のプロデュースをしたトリオと言えます。Petter Eldh の功績は現代的語感を担保しているところ、という乱暴ですが、非常に悩ましくも重要な要素に対峙しているので推しです。

(有馬)



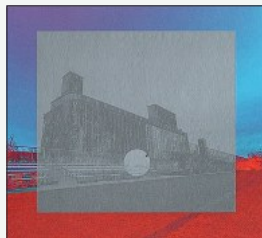
format : CD
number : EDN1285
original release : 2025



Fergus McCreadie *The Shieling*

スコットランドのピアニスト、ファーガス・マクリーディーは、2021 年よりコンスタントにリリースを重ねていて、大ヒットした 3rd 作『Stream』(2024) も記憶に新しい。瑞々しいピアノとコンポジションが彼の持ち味で、それはきっとスコットランドの少し荒々しさも秘めた自然からインスパイアされているのだらうと想像する。ジャケットのアートワークも、苔むす石、森の植物に続き、今作は雪どけの島のような場所。シャープな質感が持ち味のコンテンポラリー・ピアノトリオで、今作では土着的な民謡の影響が一層感じられる楽曲も。そこに重なるのは幼い頃から敬愛してきたというキース・ジャレット、なんとなくくわがる気がする。人里離れたコテージで録音されたそうで、透き通った風が吹き抜けてゆくを感じる。デビューよりメンバーも変わらず、一貫したトリオ編成で新しい景色を追い求める姿勢も清々しい。日の光を浴びて、あらゆる生き物が目覚め、その新しい始まりに祝福を届けているよう。

(松本)



format : CD
number : EDN1286
original release : 2025



Donny McCaslin *Lullaby for the Lost*

プログレだ。1966 年生まれのだニー・マックスリンはティーンの頃、コルトレーンやポール・ゴンザルヴェスを思慕するとともに、ロックに夢中だったらしい。その後サクソフォニストとしてブレッカーやロリンズに影響されたというが、M1 のプレイはどうだろう。巨木の如き厚いサウンドは確かにその二人を思わせる。しかしその樹は燃えている。燃え盛っている。そこにはイアン・マクドナルドが居り、ジョン・マクラフリンが居る。しかしジャズロックとも違う。彼が聴いていたのはツェッペリンやジェネシスやラッシュ。多種多様な音楽語法を集結させ、世界のすべてを語り尽くそうとするロックだ。本盤でダニーは豪壮で豊饒なビジョンを展開、そこで生起する壮烈な物語を、語り部としてドラマティックに奏でていく。それらは決してポップに収束することなく、彼方へ未来へと拡散し、嵐となって我々に迫る。うん、やっぱりダニーはデヴィッド・ボウイの継承者のひとりなのだ。付け加えれば本作においてダニーのサクソにはリバーブがかかる程度。エフェクトは多くないが、それでもエレキに劣らずカッコいい。坂本龍一っぽい M6 も良い。

(東館)



format : LP
number : EDNLP1255
original release : 2025



Sultan Stevenson

El Roi

カリブ海にあるバルバドスにルーツを持つ、ロンドン生まれのピアニスト。2023年に『Faithful One』(Whirlwind)でデビューして、本作は2025年の2作目。父親がジャズ番組を持つラジオDJだった関係で、幼少の頃からジャズはもちろん、レゲエ、カリブソ、ファンク、R&Bなどさまざまな音楽に触れていたそう。ルーツへの趣向がありながら、新鮮なグルーブ感もあるストレートなジャズ。新譜として入荷した時から、何かいいな〜と心に引っかかり、その後半年くらいして社販した。で、原文ライナーを読み、タイトルの『El Roi』が「神」を意味し、全8曲のうち5曲がそこへ繋がる組曲だと知る。そうするとアンニュイな小曲……くらいに思っていたピアノソロの「Arise」が俄然陽の差するような希望の曲に聴えてくるから、自分の感性もいい加減なものだ。そしてアルバム全体を貫く、ジャズの伝統を受け継ぐ意欲みたいなもの、ゴスペルやスピリチュアル感、音に滲むポジティブさ、このピアニストの前進力はそんなところから来ていたのかと腑に落ちた……瑞々しく頼もしいUK新世代ピアニストなのだ。

(神尾)



format : LP
number : EDNLP1276
original release : 2025



Petter Eldh

Projekt Drums vol. 2

ジャズを教育として立脚し、他ジャンルを組み込んで拡張を指針とする非直系文脈が欧州においても人気です。そこにはUKクラブミュージックシーンや米ビートシーン由来の流れ、それ以前にECMに代表されるアブストラクトの歴史を経由した層があり、その中で異彩を放つスウェーデン人ベーシストがPetter Eldhです。ここ数年の彼の業界的求心力はとても高く、欧州のある層ですでに重要人物です。本作品は彼が拘ってきたビートに対する実験的プロジェクトの第二弾です。一時代を築いたRichard Spaven、同じビジョンを共有し続けるJames Maddren、米次世代注目ドラマーのSavannah Harrisを起用したジャンルレスな方向性には、ジャズの包括性が生み出した現代のプロデュース能力の先端の現象が垣間見えます。HIPHOPの語感に寄ってはいますが、ベーシストの立場を活かしつつ、個人史に基づいてマッシュアップするモチベーションを感じますし、何より求道的に横断する表現者を応援したいです。

(有馬)



format : CD
number : EDN1290
original release : 2026



Dave Stapleton

Quiet Fire

Editionといえばまずはデイヴ・ステイプルトンである。何しろレーベルの創設者なのだ。エラいのである。などとウンチク自慢気に始めたが、それを知ったのはこの作品の紹介を決めた後である。にわかウンチクをもうひとつ。もうひとりの共同創設者ティム・ディッケンソンは写真家で、初期のいくつかの作品のビジュアルも手掛けており、Editionの美意識高いアートワークに影響しているにちがいない存在である。因みにソロ名義では久々となるこの作品の写真はデイヴ自身によるもので、サウンドの美麗で憂鬱な世界観を見事に視覚化している。もしかすると逆で、写真から着想した世界を音楽化したのかも知れない。どちらにしても、今回は12年前に始めたSlowly Rolling Cameraの路線を精錬して自身の色彩に昇華したエレクトロニックジャズ作品である。ボルタメントの効いたシンセサイザーのまどろむようなトーンが心地いい。ゲストのトランペットがマイルスに、アルトがゲイリー・パートゥに聞こえてくるのは70年代マイルスの音楽を踏まえているからか。網膜に焼きついた音の残像を探し求めて夢の中の迷宮を彷徨うような気怠い感覚を楽しめる。

(赤尾)

disk
union

ディスクユニオン

DIVE INTO MUSIC.

JAZZ SPECIALTY SHOPS

disk union ジャズ主要取扱店のご案内

【各店営業時間】 平日12:00～20:00 土日祝11:00～20:00 (吉祥寺ジャズ館[吉祥寺店]のみ10:00～20:00)

SHOP PAGE

JazzTOKYO (お茶の水)

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1-45 ニュー駿河台ビル2F

TEL: 03-3294-2648 E-mail: do12@diskunion.co.jp



新宿ジャズ館

〒160-0022 東京都新宿区新宿3-34-1 ジュラクツインBビル 3F

TEL: 03-5379-3551 E-mail: ds2@diskunion.co.jp



渋谷ジャズ / レアグルーブ館

〒150-0042 東京都渋谷区宇田川町30-7 アンテナ21 5F

TEL: 03-5489-8192 E-mail: dp3@diskunion.co.jp



吉祥寺ジャズ館 (ディスクユニオン吉祥寺店内)

〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町1丁目5-1 吉祥寺パルコ B1F内

TEL: 0422-20-8063 E-mail: dkp@diskunion.co.jp



横浜関内ジャズ館

〒231-0014 神奈川県横浜市中区常盤町4-45 アートビル 2F

TEL: 045-661-1542 E-mail: dy@diskunion.co.jp



本誌掲載の商品は、オンラインショップでもお取り扱いしております

<https://diskunion.net/jazz/ct/news/article/0/141650>



